

ハヤブサの落とし物 (Part 2)

溝田 浩美

(ひとはく地域研究員)

ハヤブサについて

ずば抜けた飛翔力を利用して、主に飛んでいる獲物を足指のつめで捕まえる昼行性猛禽類である。狩をするために障害物のない広い空間と、営巣場所として切り立った崖を必要とすることから、日本ではほとんどのハヤブサが海沿いに生息している。水平飛行時の最高速度は時速100km前後でチーターと同じくらいであるが、急降下の際には、300kmを超えることもあると考えられている（日本動物大百科、平凡社より）。



新しいお客様

2005年12月に、神戸市内の鉄塔でそれまで4年間観察していたハヤブサは死んでしまったが、2006年の夏ごろより同じ鉄塔に別の個体が姿を現すようになった。ハヤブサヒゲの太い、はっきりとした顔立ちをした雌のハヤブサである。8月の末より食べられた鳥の羽が落ちてくるようになり、12月初旬まで続いた。以前のハヤブサとは、食べる鳥の種類も違い、多くの新しいメニューが加わった。新メニューは、ヨシゴイ、ササゴイ、タマシギ、タゲリ、マガモ、コムクドリ、クロツグミ、オオコノハズクと多岐にわたる。

体が大きな割には、ちょっぴり臆病で、警戒心が強いように見える。この鉄塔にやってくるのは日没後か、早朝が多く、以前のハヤブサのようにこの鉄塔を畴(ねぐら)にしている様子はない。食後、鉄塔でゆっくり腹ごなしをすることもなく、早々に姿を消してしまう。

食事マナー

今までの観察から、ハヤブサにも食事のマナーがあるらしいことが分かった。多くの場合ハヤブサは捕らえた鳥の胸や腹の部分から食べ始める。足で獲物を押さえ込み、クチバシで器用に腹や胸の羽をむしり、まず内臓の部分を食べようだ。そして、ある程度お腹がふくると、効率の悪い翼の部分は食べ残す。食べ終わると、汚れた調理場から離れ、歩きながらしきりにクチバシを鉄塔に擦り付ける。ゆとりがあれば、身づくろいをして、食事は終了となる。食べ残した翼の部分は、食べられた鳥を特定するのに大きな手がかりとなるが、カラスやトビに横取りされ、残念ながら、なかなか私の手元へは届かない。そこで、落ちてきた羽から食べられた鳥を明らかにしていくことになる。

語りかける羽 (体羽)

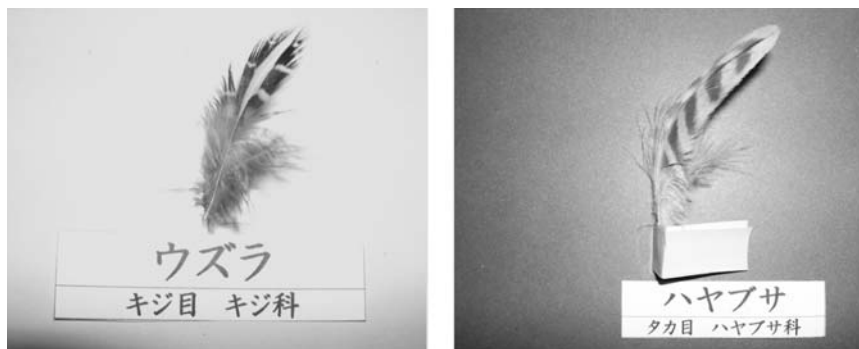
鳥の体を覆っている羽はみな同じものではなく、さまざまな役割を持っている。大きさや形、色の違いもある。また、雄や雌、成鳥と幼鳥で違うものもあれば、季節によって違う羽に着替えるものもある。羽はまず、正羽と綿羽に分けられる。正羽とは、羽軸と羽弁のはっきりした、葉っぱのような形をしている羽である。その正羽は、風切羽や尾羽など飛ぶために必要な飛翔羽と、断熱材として体温を保持するとともに、体を滑らかな流線型に保ち空気抵抗を減らす役

割の体羽に分けられる。

回収物の中では、体羽が多くの割合を占める。特に腹や胸の羽が多く回収されるが、その理由として、前に述べたハヤブサの食事方法が関係していると思われる。そこで、この体羽から餌となった鳥類を特定していかなければならないことも多い。風切羽や、尾羽のように手がかりとなる情報が少なく、大変な作業となるが、それでも、多くの体羽を見ているうちに、見分ける際のポイントや、いくつかの共通点があることが分かってきた。まず、色や模様、大きさなどが予想を立てるのに役立つ。特に羽の根元にある羽糸の部分の色や形状は、同一の個体ならばよく似ているし、科の間でも共通するところが多い。しかも、私たちが普段目にする体の色とは大きく違い、意外な色をしていることもある。ちなみにカラスの羽は基部が白色で、V字に透けている部分がある。このように一枚の羽が、本当に色々なことを語りかけてくれるのである。

科の特定に役立つ後羽

キジ類の体羽と綿羽には羽軸から派生した後羽があり、これは他の鳥と違った特徴であるとされている。しかし、よく観察するとキジ類ほど顕著ではないが、他の鳥類の中にも後羽を有するものがあることが分かってきた。そして、鳥類の科（目）によって後羽を持つものと持たないものに分かれているという特徴も見えてきた。カイツブリ、サギ、タカ、キジ、チドリ、シギ類には後羽があり、カモ、ハト、カッコウ、フクロウ、ツグミ、ムクドリなどの仲間には明確な後羽は確認できない。これは羽の同定に大きな手がかりとなる。白地に黒の横斑のある羽なら、後羽があればタカ科やシギ科の鳥を探し、なければカッコウの仲間ではないかと考え、少しずつ範囲を限定していくのである。まだ、ハヤブサの餌となった数十種の鳥類に限った結果ではあるが、今後、種数を増やし確実なものにしていきたいと思っている（鳥の種類別に後羽の有無を次ページの表に記載）。



ウズラとハヤブサの後羽

体羽から鳥の種類を識別する方法

	科	種名	ダウン	後羽	羽糸の色
カイツブリ目	カイツブリ科	カイツブリ		○	淡いグレー
コウノトリ目	サギ科	ヨシゴイ		○	グレー
		ササゴイ		○	白
		*チュウサギ		○	白
		*コサギ		○	白
カモ目	カモ科	オシドリ	○	×	白(淡い茶)
		マガモ	○	×	白
		コガモ	○	×	白(淡い茶)
タカ目	タカ科	ツミ		○	淡いグレー
	ハヤブサ科	ハヤブサ		○	白
キジ目	キジ科	ウズラ		○	グレー
ツル目	クイナ科	バン		○小さい	黒
チドリ目	タマシギ科	タマシギ		○	黒(根元だけ)
	チドリ科	ケリ	○	○	白
		タゲリ	○	○	黒(根元だけ)
	シギ科	ヤマシギ	○	○	濃い茶
ハト目	ハト科	キジバト	×	×	淡い茶
		アオバト	×	×	淡いグレー
		ドバト	×	×	白(淡い茶)
カッコウ目	カッコウ科	ジュウイチ		×	淡いグレー
フクロウ目	フクロウ科	オオコノハズク		×	濃いグレー
		*アオバズク		×	濃いグレー
ブッポウソウ目	ヤマセミ科	アカショウビン			グレー
スズメ目	ヒヨドリ科	ヒヨドリ	×	糸状	グレー
	ツグミ科	トラツグミ	×	×	グレー
		クロツグミ	×	×	グレー
		ツグミ	×	×	濃いグレー
		ムクドリ科	ムクドリ	×	×
	カラス科	カケス		糸状	グレー

○はダウンや後羽が明確にあること。×は明確なダウンや後羽が見出せないことを示す。

*は本研究以外で試料を手に入れたことを示す。

空欄は試料数が少ないため断定できないことを示す。



1,トラツグミ・2,ヤマシギ・4,ジュウイチ・5,オシドリ・6,ササゴイ・7,ムクドリ8,カケス・9,タゲリ・10,ウズラ・11,オオコノハズク・12,ヒヨドリ・13,バン・14,ドバト15,アオバト・16,タマシギ・17,カイツブリ・18,ツグミ・19,クログミ・20,ケリ・21,コガモ・22,キジバト・23,マガモの体羽

美しい落とし物

2006年12月17日、雨の降り始めた住宅街の真ん中で、うつ伏せにすっぽりと側溝にはまった状態のマガモを見つけた。ハヤブサの落とし物と思われるが、あたりには羽が散乱し、背中にはカラスが乗っていた。カラスにはマガモを引っくり返す力も、運び出す力もなく、またカラスのクチバシは羽をむしりとることに不向きで、マガモの腰の部分に汚く突付きまわしていただけだった。今回は運良く私がカラスからマガモを横取りすることが出来た。



いつもなら、写真やスケッチをとり、その後博物館の冷凍庫に入れてもらえることもあるのだが、今回は雨で汚れており、しかも大きすぎて捨てられるはずのものであった。それを長谷川太一先生がすばらしい翼の剥製標本にしてくださいました。翼はハヤブサも食べ残すほど肉の少ない部分で、意外に簡単に剥製にすることが出来たのは驚きであった。今回の展示物はそのマガモの翼である。